

第1回帯広市総合計画策定審議会第3専門部会 議事概要

1. 日 時 平成20年1月21日(月) 9:00~12:00

2. 場 所 市役所5階フロアー会議室

3. 議事概要

協議事項1 部会長・副部会長の互選について

部会長には朝日委員、副部会長には杉森委員が選出された。

協議事項2 議論の進め方について

事務局が「資料2 議論の進め方」を説明。今後の議論の進め方について確認した。

協議事項3 まちづくりの課題と取り組みの基本方向について

事務局が「資料3 第3専門部会議論シート」を説明。まちづくりの課題と取り組みの基本方向について議論をした。

(1) 学校教育について

【委員】

資料が学校教育、高等教育、生涯学習、文化、スポーツなどと分かれているが、こうした枠にとらわれずに、生涯学習を学校教育も含めたすべての学習活動と捉えた議論を先にしたほうが良いのではないか。

【委員】

市は生涯学習という言葉をどのように使用しているのか。

【事務局】

組織としては学校教育部と生涯学習部に分かれているが、第五期の総合計画で生涯学習都市というまちづくりの目標の下に学校教育を含めて位置づけているなど、場面に応じて使用している状況である。

【部会長】

今あった話も踏まえながら議論を進めることとし、体系的なところは後で整理すれば良いと思う。

【委員】

個別の議論を行いながら、全体的な視点でまとめればよいと思う。

【委員】

幼児教育を学校教育の中で一体的に議論するのがよいのか。

【委員】

議論の項目として置いてあるだけではないか。個別の議論が一通りの議論が終わってから家庭教育なども含め、生涯学習の視点から再度議論することも必要。

【委員】

みどりのおばさんが廃止になって、子どもを見守る環境が大きく変わってきている。最近自己責任ということが言われ、子どもの安全についてもまずは親が責任を果たさなければならないのかもしれないが、突然、見守り体制が変わってもこれまでとのギャップが大きく、なかなか親の意識は高まらないのが現状ではないか。生涯学習や防犯の視点からも考えなければならないのかもしれない。

また、学力のレベルについては決して帯広市は高くはないのが現状ではないか。将来の地域を支える人たちを育てるため、教育のレベルをどう上げるかということも考えなければならない。

【委員】

小学校を核とした地域づくりを考えるべきだが、地域のボランティア活動を促すならば資金的な支援も考えなければ現実にはなかなか進まない。

【部会長】

地域のコミュニティが成立しなければはじまらないということが難しいところだと思う。

【委員】

中学の学校評議員をやっているが、学級崩壊や病気になる先生など、自分が子どもの頃と今の違いを感じている。先生が親に対して毅然と物が言えないなど、教育というものを先生がやりにくくなっていることを現場の声として聞いている。一方で地域のパトロールや子ども110番などかつてはなかった取り組みもあり、進んでいる面とやりにくくなっている面の両面があるものと感じている。

【部会長】

学校現場の視点からはいかがか。

【委員】

先ほどの話にあったように、生涯学習社会をどう捉えていくのかということ考えることが大事だと思う。また、小中学校に関して言えば確かな学力、豊かな心、たくましい体のいわゆる知・徳・体に加え、帯広が好きと言える子どもが育つような環境をどうつくるのかということから子どもたちの安心安全の話も出てくるのだと思う。新しい学習指導要領の話もあり、これからの10年は教育の内容が相当変わってくるものと思う。また、学校の適正配置も踏まえて教育環境をどう整えていくのかということを考えていかなければならないと思う。

【委員】

ゆとり教育など、五期総は現在の状況に合わなくなってきた。様々な教育の問題のこれからを十分に想定しながら考えていかなければならない。

【委員】

みらい会議で学校と親のコミュニケーションが不足しているという話が出ているが、教師が子どもを叱れない、親が過保護であるなどの問題がある。いじめの問題なども子どもだけでなく親自身に問題がなかったか考えることも必要。大人の世界でもいじめはあり、それが子どもに伝わっていることもあるのではないかと思う。また、親が子どもが危ないことをさせない、簡単に物を買って与えるなど、世代が変わるごとにどんどん親が甘くなってきていると思う。その結果、けんかの仕方の分からない子ども、物を粗末にする子どもが育っているのだと思う。先生や親の子どもへの接し方について根本から考えないとダメだと思う。

【委員】

昔の親と今の親の変わり様を実感している。子どもの教育のためにはまず親を教育しないとイケないと思う。幼児からきちっと教育することでしっかりとした言葉遣いが身についてくるものだが、今の子どもはまず礼儀、言葉遣いがなっていない。学校評議員になったことをきっかけに学校行事に参加し楽しかったという声もある。地域の方が学校に入っていける機会があれば地域と学校の交流も深まるものと思う。これから増えていく高齢者が十分その担い手になれるものと思う。また、精神的に参っている先生が増えているというのも大変心配している。今後は、先生の質の維持や子ども会や老人会など町内会との連携を深める取り組みが必要ではないか。

【委員】

かつては、町内会の青年部長が青連協ともつながっていたが、いまは、PTAの中から選ぶようになってきている現状がある。また、教員免許の更新制の話もあり今後大きく変わる要素はあるのではないか。

【部会長】

自分が子ども会の行事に出られないと子どもにも行ってはダメという親もいる。親の意識を変えなければならない。

【委員】

習い事の迎えもほとんどが親。例えば3年生になったら自分でバスに乗っていくなどしなければ、乗り物一つ自分で乗れなくなってしまう。

【委員】

生涯学習のプログラムの中で、親に対する学習プログラムがあればよいのかもしれないが、そうしたところに来る親はまだ良い方なのかもしれない。そうしたところに来ない親が問題。学校の授業で子どもたちが自分の会社に見学に来ることがあるが、例えば老人ホームの慰問や十勝の歴史の学習などを通じて、学校のプログラムとして地域でのコミュニケーションをとる機会はあるのか。

【事務局】

生涯学習のプログラムでは地域を知るためのプログラムも行われているが、トータルでお話のような問題に対応していくということまで行っていない。

【委員】

親への教育については家庭学級の取り組みも行われているが、地域への宣伝があまりないように思う。もっと地域に宣伝しても良い。

【委員】

地域の中心は小学校であり、小学校の配置は地域づくりにもかかわってくる。現在進めている適正配置も、地域の人口だけでなく幅広く地域づくりの視点からも考えてほしいと思う。

【部会長】

市は各担当部門の連携を図るために4月から企画調整監を置いていると思うが、どのような取り組みをしているのか。

【事務局】

企画調整監が集まる会議を定期的に行っており、情報を共有しながら連携を図っている。

【部会長】

そうした仕組みがもっと機能すれば、様々な課題に横断的に対応できるものと思う。

【委員】

子ども会に出てこない理由には、帯広は少年団活動が活発でそちらが最も優先されているということがあると思う。せっかく、熱心に少年団活動に関わるコーチや地域の人が出て、そこに子どもたちが参加しているのだから、心の教育などは、こうした人たちの協力を得ることも考えたほうが良い。

学力については、学校、家庭で担う部分があるがその充実をどうやるか。学校でも研究活動など行っているが、家庭、地域がそれをどう受け取って活かしていくかということも考えなければならないのではないか。

【部会長】

少年団は無視できない存在。学校との連携も必要。

【委員】

少年団でのコーチの力は大きい。先ほどから出ている親の教育の場にならないものか。

【委員】

習い事などでも、大変な親が入ってくることがあるが、指導者は親に直接物を言うことはなかなかできないが、子どもへの接し方を見せることが大事だと思う。

【委員】

部活動は教師の範疇外という学校現場の意識をどう変えていくかが課題だと思う。

【委員】

良識では考えられないことが起こっている。小さいうちに対処し、悪いことは指摘する。ことが大きくなると対応が難しくなる。少年団などのスポーツ活動や子育てと連動しながら考えるべき。家庭教育はこれまで見過ごされてきた部分であり、法的な整備を考えてもよいぐらいだと思う。

(2) 高等教育について

【委員】

・地元の高校生の進路という視点から、大学の設置は大きな課題。

【部会長】

畜大はレベルが高く地元の人がなかなか入れない。

【委員】

畜大はかなり分野が限定されている事情もあり、新しい大学を望む声が出てきたのだと思う。

【委員】

新しい大学の設置は十勝にとって必要なものであり賛成だが、少子化が進み経営難の大学が多い中、環境としては厳しいという現実がある。

【部会長】

畜大や大谷短大などの先生が、産業、文化、福祉などあらゆる分野で帯広に知恵を与え、市民の学習活動に貢献しているのは地域にとって大きなプラス。仮に大学がなくなれば市のレベルは大きく低下する。

【委員】

中札内で音楽のウインタースクール、札幌でも夏に世界的な音楽のスクールが展開されている。最終的な形ではないかもしれないが大学のサマースクールなどを帯広でできないものか。

【委員】

30億でも大学はつくることできる。有名大学は無理でも看護や福祉系なら十勝全体で応援できるのではないか。

【委員】

大学ができて就職先がなければ若い人は外に出て行ってしまう。サマースクールは施設面など畜大と連携することができると思う。

【委員】

高等教育は単位がもらえて、それが活用できないとダメではないか。既存の学校との連携も考えながら、高等教育を高校の次のステップとして考えなければならない。大学をつくるのなら、魅力あるものでなければせっかくつくっても維持していけなくなってしまう。

(3) 生涯学習について

【委員】

生涯学習を大人の学習活動全体を捉えて考えると職場研修、母親教室、高齢者学級なども含まれてくる。全体的な視点で整理しなければならないと思う。

【委員】

色々な施設があるが、どんな活動が行われどう活用されているのかなかなか伝わってこない。様々な学習プログラムもなかなか人が集まらないと聞くが、一部の興味のある人のためのものではなく、多くの人に参加してもらえるようなものにしなければならないと思う。

【部会長】

生涯学習フェスティバルなどでも各館PRしているが。

【委員】

人が集まらなくて協力をお願いされることもあるが、たとえば、一生懸命人集めをしてやっと定員いっぱい集まったとしても、生涯学習のプログラムとしてそれでよいのかという疑問がある。興味を持ってもらえなくてもやらなければならない部分、興味がなければやめても良い部分があるような気がする。児童会館についても大人の生涯学習機能という視点があっても良いと思うし、動物園についても同様の視点からどう展開していくのかということも考えなければならない。

【部会長】

各館の努力は当然必要だが、それぞれの館の人たちが一番悩んでいるのだと思う。

【委員】

動物園に行って、動物の生態などを説明してもらうことがあるが、説明があると動物の見方も変わってくる。施設が古くても工夫次第で魅力が増すものと思う。

【委員】

岩内自然の村の施設運営の会議に関わったことがあるが、ソフト的な取り組みをどうしていくかといった話はなかなかできない。周辺のマップを作ろうという提案もあったが、行政の縦割りでなかなか進まなかった。横の連携をうまくやってほしいと思う。

【委員】

私にとっては、百年記念館などは何をやっているところなのか分からない。

【委員】

プログラムに参加すれば、満足してもらえるものだと思うが、市民はそもそも何をやっているのか知らないし、知っていてもなかなか一歩踏み出して参加するということまで行けないのが現実ではないか。

【部会長】

関係者では良い企画なのになぜ市民は来てくれないのかという話をよくしている。なぜそうしたプログラムに参加しないのか考えないと同じ状況が続くのだと思う。

【委員】

動物園にしても、命の尊さだけを学ぶのならもっと小規模でも良いのかもしれない。施設側の意図が末端まで伝わっていないのだと思う。

【部会長】

児童会館は昔から学校教育で活用してきている。施設をもっと有効に活用し施設の活性化を図ることが大事だと思う。

【委員】

せっかくあるものをまず知ってもらおうということが大事。

【委員】

図書館は良くなったので、次は学校図書館を地域の生涯学習施設として一般に開放するなど考えられないか。図書を地域からの寄附で集めるなど、地域の拠点として地域で育てられないものかと思う。

【委員】

生涯学習の単位は小学校の単位が良いと思っている。地域の人が入った学校運営協議会を作っている学校も全国にはある。

【委員】

小学校を生涯学習に活用するのは賛成である。家庭科室や音楽室などを地域に開放している例もあれば学校を活用して放課後一人で留守番しなければならない子どもなどが参加できる放課後対策なども行われている。開放することによる子どもの安全対策など施設管理面はクリアしなければならない課題。

【委員】

現在取り組んでいるところは、学校側が地域に相談して作り上げてきている。ただ、協力してくれるボランティアに対しては資金的なバックアップも必要である。つつじヶ丘の取り組みを通じて高齢者のネットワークができてきている。学校の姿勢次第だと思う。

(4) 文化について

【部会長】

帯広はあちこちから入ってきた人で出来たまちであり、郷土芸能として文化を発展させるのは難しいように感じる。

【委員】

自主的な文化活動に対する支援は一部の団体に対してではなく、もっと幅広い支援が必要ではないか。

【部会長】

あまり幅を広げると団体に対するチェックも薄くなるなど難しい面もある。

【委員】

帯広は文化活動が盛んといわれているが、小さい頃から良いものを見る機会が少ない。美術館もあるのだから、内容が分からなくても小さい頃から良いものを見て、親の話聞くことが後々つながることがある。

【委員】

市民劇場には美術、書道、民謡舞踊、バレエなど色々な技能をもった人たちがいる。こうした技能を活かして子どもたちに芸術を伝えるため、学校に対し学校の中で活用できないかという投げかけをしている。学校によって取り組む姿勢や子どもたちの質にかなりの差があったが多くの申し込みがあったが、子どもたちに色々なものを見せ教えてほしいという姿勢の理解ある校長先生もいる。子どもも新しい世界を体験して楽しんでくれており、もっと学校が地域を通じて様々な芸術を伝えられれば子どもは豊かに育つと思う。

【部会長】

地域をうまく使う学校とそうでない学校があるのだと思う。

【委員】

地域の人が学校に入ってくる動きも進みつつある。特定の分野に精通した人が学校支援ボランティアとして水泳指導や絵の指導などで学校に入ってきている。現在、モデル的に2校で実施しているが、独自にやっているところもあり、こうした動きは今後広まっていくものと思う。こうしたボランティアの協力を得て、子どもに良いものを見せ、体験させることが必要だと思う。ただ、学校は閉鎖的であり広めていくのは大変な仕事である。

【委員】

学校は陶芸の窯を持っているが活用されていない。せっかくの設備を活用し土いじりを通じた情緒教育も考えられるのではないか。

【委員】

人材面では退職教員を活用すべき。現在も学校を開放した土曜日にボランティア活動を行っており、組織的に展開しても良いと思う。

【部会長】

地域の人材をうまく活用すれば子どもにとって色々な体験をさせることが出来ると思う。退職教員の活用の話があったが先生の意識はどうなのか。

【委員】

すべての先生が協力的なわけではないが協力してくれる人もいる。陶芸の話があったが逆に学校が持っている陶芸の窯を家庭学級で活用することも考えられる。

【部会長】

お話も含め、様々な部分で学校教育と生涯学習がリンクする部分が出てくるように思う。

【委員】

子どものうちは色々なものに触れることが大事で、将来的に自分に合うものを選択していけばよいと思う。

【委員】

市としては文化活動をどのような方向で促進していくのか。施設的なものなのか人材育成の類になるのか。

【事務局】

文化活動を市が前面に出て引っ張るということにはならない。民間に出来ないことは行政がやらなければならないが、活動団体と市民のマッチングなど市民の主体的な活動を促すことが中心となる。

【委員】

帯広には設備の整った大きな展示場がなく文化活動の発表の場がないという現状がある。

【委員】

なかなか使わせてくれないが美術館の活用を考えても良い。

(5) スポーツについて

【委員】

帯広は駅伝の合宿に適しているとの競技関係者の話もある。市民に対する環境整備はもちろんだが、外部の人に向けた環境整備も必要。一流の競技者が来て交流することで地元の競技者のレベルも上がる。

【部会長】

一流の競技者に来てもらうには、パイプを持つことが必要。1回きりではなく継続的に来てもらうことで、競技レベルの底上げにつながる。

【委員】

地域として何らかの支援も必要である。

【委員】

スポーツを生涯学習活動として考えると、今後健康づくりとして市民が参加しやすいスポーツ活動を促進していくことも必要ではないか。

【委員】

今後の学校施設の整備はスポーツを含め一般の市民が活用することも考えて進めなければならないと思う。

以上